

第 18 期生 卒業エッセイ

チーム小野

第 18 期生 芝田 朱莉

いつの間にか、卒ゼミの日を迎えてしまった。緊張しすぎて声が震えた入ゼミ面接から、卒論を書き終えた達成感に溢れる今日この日まで、小野ゼミ生として過ごした日々は、どのようなことでも事細かに思い出出すことができる。本当に、2年間よく頑張り抜いたなあ。感慨深い。

私は、チームプレーが得意な一方で、個人プレーはいまいちやる気が出ない節がある。その性質のせいで、私の卒論の執筆速度は亀の歩みであった。同期や先輩、そして小野先生の大幅なテコ入れを頂戴した12月後半になって初めて、私のエンジンは本格始動した気がする。皆様の存在がなければ、間違いなく私の卒論は完成しなかった。社会人になるまでには、この個人プレー嫌いをどうにか克服しなければならないと切実に思っている。しかしながら、今回このエッセイで述べたいことは、個人プレー嫌い克服法ではなく、チーム小野をいかに維持・発展させるかということである。

チーム小野とは、私の、私による、私のためのチームである。小野先生、第16期生、第17期生、第18期生、そして第19期生の皆様が構成メンバーである。主な活動内容は、私との定期的な交流である。先述したとおり、私にとっては、私を支えてくれる人たちの存在が非常に大切である。遡れば小学生の頃から、私にとって最も恐ろしく、悲しいことは、人との別れであった。大抵の出会いというものは、共通のコミュニティの活動を通じて生まれ育まれるものである。そのコミュニティの活動が継続する限りは、相手との関係は深まっていくけれども、活動が終了してしまうと、あっという間に疎遠になってしまう。私は、何日も何年も喜怒哀楽を分かち合った大切な人たちと、たかが少し道を違えただけで疎遠になってしまうことが、心底恐ろしく、悲しく、また許せないと思う。

ゆえに、私はここに、チーム小野の結成を宣言しようと思う。これから私たちは、小野ゼミを卒業して別々の道を行く。就職先は業界すら違うし、知らない誰かと結婚して家庭を築くだろうし、もしかしたらこの2年間以上の濃密な交流は、できないかもしれない。たとえそうだとしても、これまでと形が変わってしまったとしても、それでもいいから、私は今胸いっぱい抱えている、小野ゼミが大好きだ、というこの思いを決して忘れたくない。決して忘れずに、これからも必死で縁を繋ぎ止めていきたい。

手始めに、チーム小野のプロデューサーとして、メンバーに宣言しておくことにする。先生、来年こそは、飲み会したいです。近況報告も書かせていただきます。ですので、私のことを忘れないでください。先輩方と後輩、もっともっと仲良くなりたくたいです。連絡したら煙たがらずお返事くれたら嬉しいです。同期、卒ゼミしても、いっぱい遊ぼうね。定期的に何かしよう。無条件に大好き、軽率に大好き。

チーム小野の活動期間は、私が死ぬまで。それは途方もなく長い活動期間であるが、小野ゼミ生として過ごした2年間で培った、様々な能力やスキルを存分に活かして、この素晴らしい活動を続けていきたい。